

幼稚園及び保育所における動物介在活動の意義 —動物飼育活動を中心に—

百瀬ユカリ

Effects of Animal Assisted Activities in Early Childhood Education

Yukari MOMOSE

はじめに

近年、子どものいじめが大きな社会問題となっている。そのため、幼児期において人とのかわり深め、自他への共感や、思いやりの心を培うことが大きな課題となっている。本稿では、子どもが「命あるものから学ぶ」体験としての動物介在活動の意義を先行研究から改めて見直すとともに、具体的な活動事例と幼児教育に携わる園長・主任への聞き取り調査から、幼児教育における動物介在諸活動としての動物飼育活動の持つ有用性を見出そうとするものである。

1. 動物介在諸活動とは

動物を介在する諸活動を表す言葉の総称として「動物介在諸活動」の用語が用いられている。動物介在諸活動は主に、①介護・福祉活動を目的とした動物介在活動（Animal Assisted Activity: AAA）、②動物を用いての治療支援活動である動物介在療法（Animal Assisted Therapy: AAT）、そして③動物を教材として用いる動物介在教育（Animal Assisted Education: AAE）の3つがあり、¹⁾動物とのふれあいや相互作用から生まれる様々な効果が医療や福祉、教育の現場で活用されている。

(1) 動物介在活動（AAA：Animal Assisted Activity）

治療と評価を伴わない動物とのふれあい活動である。動物とボランティアが医療や福祉、教育関連の各種施設などを訪問し、対象者（参加者）の生活の質の向上、情緒の安定、レクリエーションなどを主な目的として行われる。あくまで対象者に与える癒しが主であり、治療目的のものとは異なる。²⁾

(2) 動物介在療法（AAT：Animal Assisted Therapy）

医療行為の一環として動物とのふれあいが行われ、医療の専門家が治療と評価を行う。リハビリ

テーション、身体的機能や精面などの向上や回復が目的で、対象者に合わせた個別のプログラムを組み、治療目標に合った動物が選択される。

高齢者の場合は孤独感が癒され、友情や安心感がもたらされたという効果、動物の世話をすることによって生活に対する自助努力が高まるなどの効果がある。抑鬱傾向が強い場合などは、その傾向が低減すると言われ、情緒に障害を持つ患者は、自信の回復および不安感の低減など、多くの効果が報告されている。³⁾

(3) 動物介在教育 (AAE : Animal Assisted Education)

動物介在教育は、生き物を介して、命の大切さや他者への思いやり、自然環境に対する興味、生き物に関する理科的知識を育む教育のことである。その目標とするところは、「いのち」の大切さ、他者への思いやり、自然環境への配慮を体験を通して子どもたちに教えることで、肉体的・精神的に健康な子どもたちを育てることにある。⁴⁾

歴史的に見ると1980年代から欧米を中心に、人と動物との関係が人に与える影響の重要性が認識されるようになった。それに伴い、伴侶動物などを用いての介護や福祉、疾病治療や機能回復、教育に関する諸活動が行われてきた。その中心となるのが、伴侶動物を伴って病院や福祉施設を訪問し、治療や患者・入居者の生活の質の向上への支援を行う活動である。近年、我が国でもこのような活動への関心が高まり、多くの活動事例がある。

一方で、学校における動物飼育のような動物を用いての教育は、古くから行われてきた。特にわが国では、学校における動物飼育の教育的効果が明治時代より注目され、小鳥、キンギョ、ウサギ、ニワトリ、カイコ、ハト、オタマジャクシなど独自の動物を用いての教育が一貫して展開されてきた。⁵⁾ また、動物飼育型の動物介在教育のほかに、幼稚園や保育所、小学校に犬やハムスターやヒヨコなどの小動物を連れていく訪問型の動物介在活動も実施されている。

2. 幼稚園、保育所における動物とのかかわりに関する取り扱いについて

都市化が進み、居住環境の変化から家庭での動物飼育が減少する中、日本の多くの幼稚園や保育所では、子どもが生き物と直接ふれあう機会を与えている。

幼稚園教育要領では、領域「環境」の「内容の取扱い」の中で、「身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探究心などが養われるようにすること。」⁶⁾ と記されている。保育所保育指針では、「身近な動植物に親しみを持ち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く。」⁷⁾ と示されている。また小学校教育要領解説生活編には、生活科の内容として「(7) 動物を飼ったり植物を育てたりして、それらの育つ場所、変化や成長の様子に関心をもち、また、それらは生命をもっていることや成長していることに気付き、生き物への親しみをもち、大切にする

ことができるようにする。」⁸⁾と記され、幼児教育から小学校への学びの連続性がある点も注目しておきたい。

ところで幼稚園や保育所では、どのような動物を飼育しているのだろうか。井上らの東京都及び兵庫県の幼稚園・保育所の飼育動物に関する調査⁹⁾によると、動物飼育の実施率はカテゴリーによって79.1%～100%であり、飼育されている動物はほ乳類ではウサギが最も多く、次いでハムスターが多かった。東京都の公立幼稚園ではモルモットが最も多かった。鳥類では小鳥、は虫類ではカメ類が、両生類ではオタマジャクシが、魚類ではキンギョとメダカが多い。

また、三上らの広島県内の私立幼稚園の調査¹⁰⁾によると、動物を飼育している幼稚園は73.2%であった。飼育動物の種類は21種類で、最も多く飼育されているのはウサギ:61.1%、次いでカメ:40.2%、インコ:40.2%、ニワトリ:19.5%であった。¹¹⁾その他の先行研究の結果をみてもそれぞれの調査により、飼育されている動物で最も多いのはウサギで、次いでカメ、3位以下は地域差が出ていた。¹²⁾

幼稚園・保育所における動物介在活動に関する先行研究の件数に着目すると、国立国会図書館蔵書検索NDL－OPACでキーワード検索した論文件数の結果、以下の通りであった。

「動物介在活動」のキーワードの論考は、1998年2件から始まり、2002年5件、2003年6件、2004年9件と増加し、2010年から2014年9月12日現在は毎年3件以下で推移し、合計58件であった。一方、「動物介在教育」のキーワードで検索すると、論文は、2003年2件から始まり現在までに42件であった。2010年10件、2011年8件、2012年7件と動物介在活動よりやや遅れたが、現在は、より注目されている様子が窺える。また、「動物介在活動」「幼稚園」の二つのキーワードでは1件も無く、同様に「動物介在活動」「保育所」でも全く無かった。これは、多くの幼稚園・保育所で飼育活動は行っているものの、それが動物介在活動としての言葉では捉えていないともいえる。¹³⁾なお、「動物介在教育」「幼稚園」の二つのキーワードでは2004年2件から始まり、現在までに9件であった（「動物介在教育」「保育所」は無い）。

また、「動物飼育」のキーワードで検索すると1928年1件から始まり、426件であった。「動物飼育」「幼稚園」のキーワードでは10件、「動物飼育」「保育所」の二つのキーワードでは1件、と極めて少ない結果であった。¹⁴⁾

以上述べたように、先行研究の論考数から「動物介在活動」及び「動物介在教育」に関しての論考に比べて「動物飼育」に関する論考が歴史的にも古く、数的にも圧倒的に多く、「動物介在活動」及び「動物介在教育」としての捉え方は最近のことである。また、「保育所」に関しての先行研究は非常に少ない。このことから本テーマの今日的な意味があると思われる。

3. 動物飼育活動の幼稚園及び保育所における事例より

小動物の飼育活動について、埼玉県及び神奈川県内の幼稚園及び保育所の実践例を主任及び担任保育者に対しての聞き取り調査によって収集した。これらの情報から、動物飼育活動における効果

を探ることにする。

(1) 事例その1 幼稚園：5歳児6月 アリ

年長児6月、ある男児が家からプラスチックの容器を持参し、土とアリを入れた。興味を持った数人が毎日アリの様子を見て話し合い、餌として給食の残りのパンをいれた。

アリの巣は、やがて部屋状になってできた。保育室内にアリのコーナーを設けることによって、クラスの子どもたち全員へと興味が広がった。実際に観察することで、子どもたちの科学的な好奇心が深まっているようであった。担任は、子どもたちが自由に見ることができるよう図鑑を用意した。また、子どもたちの気付きや驚きを帰りの集まりなどで伝えていき、クラス全体の話題にしていった。

(2) 事例その2 幼稚園：5歳児6月 ザリガニ

ある男児が、自分で捕まえたザリガニを持ってきた。大きくてはさみをよく振りかざし元気が良く、「大王」という名前がついて子どもたちの人気者になった。ところが、ある日ザリガニを洗っているとき、そのザリガニが素早く逃げてしまった。皆で探したが見つからず半分諦めていたが、1週間程たったある日、近くの田んぼの傍にいたのを、隣のクラスの友だちが見つけて知らせてくれた。クラスのみんなは大喜びで、全クラスの子どもたちに報告に行き、園全体で大きな話題となった。

子どもたちがザリガニを、まるでクラスメートのように感じていたのがとても印象的な事例である。生き物を飼うと、その生態や飼育の仕方などに話が向くが、身近に生き物と接していることで、仲間や家族のように親近感を持ち、豊かな感情も育まれることにも注目したい。また、保育者の役割は、命の大切さを伝えるだけでなく、子どもと共に生き物に真剣に向き合うことが大切であると実感した事例である。

(3) 事例その3 幼稚園：3歳児6月 カブトムシ

年少児(3歳児)のクラスの子どもたちが、カブトムシの幼虫をもらった。全員にとって初めての経験であり、とても興味深く毎日ケースを眺めていた。時々、幼虫が土の中から顔を出すとみんなで集まって、じっと見ていることもあった。夏休みが過ぎ、2匹のカブトムシが成虫になった。そして、そのカブトムシは、冬を越え春先まで生きていた。子ども達はエサをやったり、水分を保つために霧吹きをかけたりと、一年にわたって一生懸命世話をした。子どもたちは、カブトムシと共に幼稚園生活をスタートし、一年間を一緒に過ごした。幼虫から成虫へと育てていくカブトムシは、子どもと生活を共にする存在となっていた。

(4) 事例その4 保育所：3歳児4月 キンギョ

水槽の中で泳ぐキンギョは、途中入園後、なかなか保育園に馴染めず、不安になっている子ど

もとの話のきっかけ作りになることがよくある。初めての集団保育の中で緊張しているなかで、キンギョを見ているうちに心がほぐれてきたという事例は、年齢を問わず多い。特に3歳児にとっては、「おさかなさん…」などと言って親しみやすさを感じているようだった。

水槽の位置を、子どもの目の高さにして見やすいようにし、時間を決めて子ども達が餌やりをするようにした。キンギョが日々成長していく様子がわかるようになり、病気などの異変が起こった時も真っ先に気が付くようになった。キンギョとのかかわりが心のよりどころになり、安心して保育室に自分の居場所ができたようにも見えた。

(5) 事例その5 幼稚園：5歳児5月 ニワトリ

年長児のクラスに、保護者が持ってきたヒヨコが仲間入りした。「ピーちゃん」と呼んで皆で大切に飼うようになった。ピーちゃんは次第に大きくなり、メスのニワトリになった。ある朝、そのニワトリが、たまごを産んでいた。子どもたちは、この卵をどうしようか話し合い、みんなで、ホットケーキを作ろうということになった。ニワトリは毎朝、卵を産み、グループごとに毎朝、順番にホットケーキを作った。子どもたちと保育者が一緒になって、ニワトリを通して、保育を創っていった例である。

現在は、鳥インフルエンザなどの心配もあり、ニワトリを飼う園は、少なくなってきた。衛生面に気を付け、保健所等の指導を受けながら飼育したいものである。

(6) 事例その6 保育所：3歳から5歳児 バッタ

園庭や近くの公園の芝生や草むらには、たくさんのバッタが潜んでおり、5～6月になると、小さなバッタが飛び始める。子どもたちにとって、草むらのバッタは目線に近く、よく見つける。捕まえると、飼育ケースに入れて観察している。その際は、必ずまたもとの草むらに戻してあげるように仕向けている。秋になると大きくなったバッタに再び出会うことができ、成長を感じることが出来る。飼育ケースの中での昆虫の飼育には限界があるが、自然の中では、時間をかけて生き物との出会いとその成長を体験することが出来る。このような体験は小学校の学習につながるものであり、幼児期にじっくり観察し関わった子どもは、より興味をもって取り組むことができるであろう。幼児期は、様々な体験を通して学習の基礎を作る場でもある。

(7) 事例その7 幼稚園：5歳児 カメ

年中組の3月に、年長組から世話の仕方を教えてもらい、4月から当番の子どもたちがエサやりなど毎日カメの世話をしている。ただし、油断すると脱走してしまうので、子どもたちは水槽を清掃するときに、カメを入れておく適当な大きさの容器が必要であることを経験する。水槽を掃除する時、カメを見守る役を担ったり、水槽を洗ったりと分担作業もできる。カメは少しずつ大きくなるが、子どもが気づきにくい程のゆっくりした成長なので、時々写真を撮って比較をすると成長を実感できる。また、冬は冬眠し動きが緩慢になるなど、季節による生き物の姿の変化も体験できる。

4. 幼稚園長・保育所長への動物飼育活動に関する聞き取り調査より（抜粋）

(1) A 幼稚園長より

「4月に入園して間もない頃、ダンゴムシに興味を持ち、ダンゴムシ探しを楽しみに登園してくる子どもがいます。クルッと丸くなり形を変えていくことがとても興味を引くようです。また、手の中に納まる大きさで、つかめるようになることも自信につながっています。ダンゴムシは乾燥するとすぐに死んでしまうので霧吹きをしたりしますが、飼育には不向きです。飼うというよりも園庭や手の中で、その姿や動きを観察する方が良いと思います。多くの子どもにとって、ダンゴムシは初めて出会う生き物になるかもしれません。このようにして生き物に親しみを持ち、気のおもしろさや不思議さに気付く体験を大切にしたいです。」

(2) B 幼稚園長より

「開園当初からイヌ、ウサギ、ハムスター、カメをはじめ、少々めずらしい鳥などを含め、全部で15種類の小動物を飼育しています。飼育というより、一緒に生活しているという感じです。子どもにとって、入園してすぐにふれあう動物たちの存在は、お友達のようなものになっています。動物の世話をすることで相手の気持ちが分かるなど、学ぶことが多いと実感しています。なお、本園ではバスの運転手さんが、動物の飼育に大変詳しく、中心となって世話と飼育の指導をしてくれるので助かります。」

(3) C 保育所長より

「本園では、鳥インフルエンザが流行した時から、鳥や哺乳類の飼育は一切やめてしまいました。保育所は抵抗力の少ない低年齢の子どもたちが居ますので、感染症にはとても敏感になります。動物の飼育が子どもの情緒面により影響があるとわかっているにもかかわらず、病気と隣り合わせでは困難です。それでも、金魚は安全なので、保育室内に水槽を置いて飼っています。水槽の掃除は大変なので、保育者が行います。」

(4) D 保育所長より

「かなり前からメダカとキンギョと虫以外は飼っていません。生き物ですから、子どもにまかせっきりにいうわけにはいかないことが一番の理由です。保育士に動物の世話をする時間的な余裕がないということでもあります。特に、鳥インフルエンザが流行ったことが決定的な理由になりました。以前、市内のある動物を飼っている保育園で感染症が発症し、保育園での動物の飼育は衛生的に良くないような印象を持ってしまいました。動物を飼うことで子どもの心の成長に意味があることは十分わかっているつもりですが、これからは動物飼育の予定はありません。」

以上のように、今回の聞き取り調査では、幼稚園長からは動物飼育に対して肯定的意見が多く、保育所長からは動物飼育の難しさを指摘する声が多かった。

5. 動物介在教育（動物飼育）で期待される効果と問題点

先に述べた幼稚園及び保育所での事例と、幼稚園長及び保育所長からの聞き取り調査による内容から、以下のような効果（具体的な子どもの変容）があったと考えられる。

(1) 絵本や図鑑の絵や写真ではなく、実際に生き物を育ててみることで、生き物の生態や飼育の仕方などに関心を持って図鑑を見るようになり、興味や関心が広がっていく。

(2) 毎日、生き物の世話をすることで成長の様子や健康状態の小さな変化に気づき、発見の喜びを味わったり、状況に対応する方法を考えようとするようになる。

(3) 人も生き物（動物）も共に生きていることを実感する。（お腹がすくこと、痛いこと、寝ること、嬉しいこと、悲しいこと、汚いことは嫌なことなど）

(4) きれいになると動物も嬉しいので、動物のふんの片づけやカゴの掃除など進んで世話をするようになる。

(5) 関わってきた生き物（動物）との「別れ」を経験することで、命の大切さ、命の終わりの悲しさ、誕生の喜びを感じる。

(6) 自分が発見したことや興味を持ったことを、誰かに話そうとしたり、体で表現しようとする。

先行研究の中では、動物介在教育で期待される効果について、次の3つをあげている。¹⁵⁾

(1) 身体的効果：運動技能、生活技能、健康増進・維持、免疫系の発達 など

(2) 心理的效果：不安の軽減、ユーモア、笑い、自尊心の高まり、共感、責任感 など

(3) 社会的効果：コミュニケーション（言語・非言語）の促進、自立・集団活動への参加、集団の雰囲気改善 など

ただし、これらの効果は単に動物とかかわっているだけでもたらされるのではなく、子どもと動物とハンドラー（動物を扱う人）、保育者（教師）の調和のとれた相互作用が成り立つときにその効果がより発揮される。¹⁶⁾ これが飼育活動を超えた、「動物介在教育」の効果である。また、中川によると「大人が飼育環境を整え適切な飼育法を指導しながら学年の教科として位置づけることで、子どもたちに豊かな感性を養うなど、小学校の実践によって、学習指導要領が求めるような「命の教育」「科学教育」に十分な成果をあげることが確認された」としている。¹⁷⁾

しかし、動物介在活動や動物介在教育は動物が介在することによる問題点も存在する。子どもが、動物が苦手な場合や動物アレルギーをもつ子ども場合、必ずしも効果的な活動（教育）であるとは言えない。直接生き物（動物）に触れない子どもに配慮し、ただ観察するだけでもよいことを知らせるなど、緊張感やストレスを除くことが必要である。また、子どもの状態を考慮し、その場に適した動物の選択も重要となる。さらに、動物の命の尊さ尊重し、活動に関係する全ての人が動物に対して愛情を持って接することが、何より大切である。そして、長期休暇中の世話をどうするのか、病気やケガをした場合の獣医師との連携、職員間の連絡、死との直面（心のケア、死骸はどうするのか）等、動物の種類やそれぞれの環境に応じて様々な配慮が必要である。

おわりに

本研究では、動物が介在する活動としての動物飼育について、先行研究からその意義を探り、実際に幼稚園及び保育所での事例等について聞き取り調査を行った。幼児教育における飼育活動では、命の大切さを教えることはもとより、それ以上に「自分以外の人や動物などの存在を認め、共に生きることを知ることの大切さ」を伝えていくこと、「同じ生き物（命あるもの）同士」の連帯感を子どもたちに体験させていくことが重要である。

生き物とのふれあいは、科学的な思考の基礎を培う。また、生きるためには自分だけではなく他者の力が必要であることも学ぶことができる。飼育活動の経験は、他者の立場や気持ちを理解し、人や動物と共存しながら生きて行ける子ども、人間性の豊かな子どもを育てるために重要である。

一方、動物飼育を行うための環境や協力体制、対象となる動物の選定など、様々な課題も存在する。今回の保育所長による聞き取り調査のなかで「衛生面やアレルギー対策を考えると、生き物に代わるモノがあったら取り入れてみたい」という意見が少なからず見られた。具体的には、動物に代わるモノ（例：動物型のロボットなど）を介した活動について前向きな意向もあった。

近年、情報機器の進歩はめざましく、子どもたちは日常生活で多くのモノを扱うようになっている。こうしたことを踏まえて、今後は、動物の持つ良さから Animal Therapy と、動物以外のモノから得られる良さがあるとすれば何かを探るために Robot Therapy の観点からの比較を視野に研究を続けていきたい。

〈謝辞〉

本稿作成に当たり、ご多忙中にもかかわらず面接調査にご協力下さいました埼玉県所沢市内及び神奈川県秦野市の幼稚園長・保育所長はじめ諸先生方の皆さまに感謝し、厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 社団法人日本獣医師会 (2009) 「動物介在諸活動（動物介在活動・動物介在療法・動物介在教育）と獣医師及び獣医師会の役割」 1-6 頁（2 頁）
- 2) SCIENCE FACTORY ltd. 動物プロダクション事業部ホームページ：<http://www.sf-japan.net>（閲覧日 2014 年 9 月 12 日）
- 3) 前掲 2)
- 4) 金岡美幸・谷田 創ほか (2012) 「幼稚園における動物介在教育の実践—生き物との関わりが幼児の生活リズムに及ぼす影響を明らかにするための基礎的研究—」 広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要 第 40 号 295-299 頁 (295 頁)
- 5) 前掲 1)
- 6) 文部科学省 (2008) 「幼稚園教育要領解説」フレーベル館 136 頁
- 7) 厚生労働省 (2008) 「保育所保育指針解説書」フレーベル館 85 頁
- 8) 文部科学省 (2008) : 「小学校教育要領解説 生活編」日本文教出版 34 頁
- 9) 井上美智子・無藤 隆 (2009) : 「幼稚園・保育所における自然体験活動の実施実態 (2) —動物飼育の実態—」教育福祉研究 / 大阪大谷大学教育福祉学科 (編) 1-7 頁
- 10) 三上崇徳・木場有紀ほか (2008) : 「広島県下の私立幼稚園における動物飼育に関するアンケート調査」 Animal Nursing 第 13 巻第 1 号 55-61 頁
- 11) 前掲論文 5) 56 頁

- 12) 前掲論文 2) 3 頁 表3 動物ごとの飼育割合と先行研究との比較 より
- 13) 藤岡久美子 (2013): 「子どもの発達と動物の関わり—動物介在教育の展望—」 山形大学大学院教育実践研究科年報 (4) 5 頁
- 14) 国立国会図書館蔵書検索 NDL - OPAC (閲覧日 2014 年 9 月 12 日)
- 15) 甲田菜穂子 (2011): 「身近な動物との関わりから学べること」『教育と医学』2011.7 86-92 頁
- 16) 前掲論文 15)
- 17) 中川美穂子 (2007): 「小学校における動物飼育活動の教育的効果とあり方と支援システムについて」お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要 Vol.4 53-64 頁

参考文献

- 浜本幸子 (2012): 「動物介在教育: 実践を通しての考察と今後への提案」 芦屋大学論叢 57 51-63 頁
- 今野洋子・佐藤満雄・舟橋彰子 (2012): 「動物介在教育における動物愛護教室の現状と課題 —幼稚園教諭を対象とした質問紙調査から—」 北方圏学術情報センター年報 Vol.4 59-63 頁
- 中島由佳・中川美穂子・無藤 隆 (2011): 「学校での動物飼育の適切さが児童の心理的発達に与える影響」 日本小動物獣医学会誌 64 227-233 頁
- 並木美砂子 (2008): 『子どもが動物に出会うとき』 風間書房
- 谷田 創・木場有紀 (2004): 「幼稚園における動物飼育の現状と動物介在教育の可能性」 日本獣医師会会報 57-9 543-548 頁
- 谷田 創・木場有紀 (2014): 『保育者と教師のための動物介在教育入門』 岩波書店
- 照屋建太・喜友名静子 (2005): 「沖縄県の保育所(園)における身近な自然環境に関する研究 (1) 保育環境としての飼育動物」 沖縄キリスト教短期大学紀要 33 115-125 頁
- 吉田太郎 (2011): 「動物介在教育の試み —学校は楽しい場所でないといけない—」『教育と医学』2011. 7 74-85 頁

(2014 年 9 月 26 日受理)